

四恩と武士道

武士道協会理事

田中成明

忘己利他の心

東京都日野市にありまます真言宗の名刹金剛寺は、高幡不動尊として親しまれています。今年の正月には五十万人以上の人があり、節分までに百万人の参詣者がありました。三万坪の境内に七堂伽藍が建ち、重要文化財の不動堂では、一時間おきにお護摩が厳修されます。私はお護摩の始まる前の十五分間「四恩」について、五万人の人々に法話をしました。心地観経に説く「四恩」の第一は「父母の恩」です。我々の生命の元は父母であり、その父母にもそれぞれ父母がいます。仮に二十五

代(約七百五十年)まで溯れば、一人の生命に三百三十五万四千四百三十二人もの御先祖さまがいることとなります。さらに百代も溯ると数えきれないほどの御先祖さまの教になります。自分の生命を大切にすることは、跡切れなく続いた生命のリークの末に、今の自分が確かに在ると自覚し、他者の生命、生きとし生ける生命を自己に重なる人として尊ぶこととなります。

第二は「国の恩」です。平和に暮らすことができるのは何よりも幸福です。そして、経済大国日本は世界中の国々に援助をし、感謝されています。これは名誉であり誇りがもてます。第三は「社会

の恩」です。各人が責任をもって仕事をしてくださるおかげで、便利、快適、文明生活を享受できます。反対に無責任で誠意がなく克己心の無い社会は、墮落し発展もしないでしょう。

第四は「神佛の恩」です。大自然の力を信じ畏怖し、太陽、空気、水、山川草木に神を認め、草木国土悉皆成佛と思ひ、共に生きるという生きとし生ける諸々に思いやりの心をもつ共生きの考えが佛教の願いなのであります。

自分の利益のみを追求しますと「我利我利亡者」となり、相手の利益を優先(忘己利他)すれば、相手も喜び自分も喜びことになります。この四恩を報じていくことは、武士が守ることを求められ、



▲たなか・じょうみょう
1947年、埼玉県生まれ。'68年、東京金剛寺(高幡不動尊)にて出家得度。'70年京都大覚寺伝灯学院卒業。同年、国際仏教興隆協会よりインドに派遣され、'75年に帰国。'78年から欧米で仏教を伝道し2001年帰国。アメリカ大日寺住職。国際マンドラ協会展長。著書に『神通力』(総合法令出版)、『親孝行』(日新報道)などがある。

またそう躰けられる道徳規範である「武士道」と通じ合います。

佛教と武士道

一九七四年夏のことでした。私はアフガニスタンとパキスタン国境地帯にあります「ハツダ」というガンダール佛像発祥地を調査していました。その時、ソ連に対してゲリラ活動をやる兵士に拘束されました。彼らは皆イスラム教徒ですが、彼らの御先祖さまは千年間も佛教を信じていました。不殺生を守る佛教徒の願いは「殺したくはない」「殺されたくはない」です。ですが、銃を持ったゲリラに取り囲まれた刹那、私は日本人として潔く死ぬ覚悟をしていました。それは日本やインドで真剣に佛道修行してきた私の死生観で、釈尊の地で死ぬのなら佛弟子として本望だ、との決意心でした。幸いにも私は無傷で解放されました。

ところで佛教の開祖釈尊は、四姓制度の第二クシャトリア(武士)に生まれ、釈迦国の太子として育ちました。十五歳から二十九歳まで幾度も戦

場に赴き、敵を殺傷しました。戦場で多くの屍を見てシッダルタ太子は苦悶をしました。そして、遂に王位継承を捨て、親を捨て、妻と生まれたばかりの長男ラーフラを捨てて出家しました。クシヤトリアの家に生まれた者は、国を守り一族を守り国民を守る義務があります。武士をやめることは死を意味し、出家遁世は最大の親不孝でした。しかし、六年間の苦行の後、シッダルタ太子は釈尊となり、その教えはアジアの光明となり日本に伝えられました。大乘佛教の教えの中で武士の抛り所となったのは臨済宗でした。

生命を尊ぶ、崇高な精神

鎌倉には建長寺、円覚寺の二大本山が執権北条時頼・時宗父子により建てられ二人は熱心に坐禪を修しました。時頼は「心こそ心迷わず心なれ心に心心ゆるすな」と悟境を述べています。時宗は蒙古襲来の困難に、生命を抛って戦い日本を救いました。また京都には、妙心寺・南禅寺・大徳寺・天龍寺・建仁寺・相国寺・東福寺などの大本山が

あり、足利将軍家をはじめ武将らの生き方死に方に禅匠が大きな役割を果たしました。上杉謙信と武田信玄の両将は、地方の禅匠に参禅学道し、勇猛心、礼義、誠実、克己心を極めました。自らを厳しく律しつつも、殺生を生業としていた武士達は、佛の慈悲に救いを求めました。武士は殺生を肯定しながら一方では生命を尊び、深い内省から人間としてあるべき姿を強く求めたのです。武術に秀でるのみではなく、心の豊かさを求めて茶の湯、和歌、書、能などに励み文武両道を学修したのです。『五輪の書』を著した宮本武蔵は、佛道を修し大悟し「千日の稽古を鍛とし万日の稽古を錬とす」と、日々精進を怠りませんでした。

徳川幕府が磐石になると、平和時の道徳規範が必要となり「義」「勇」「仁」「誠」「名誉」「忠誠」などの気高い徳目が制定され武士道が尊ばれ重んじられました。この崇高な精神は、今日の日本人が求めるべき目標であると思います。四恩の教えを大切にし、武士道精神を実行したならば、この混迷する世の中を変えられる力になると考えます。